

海に生きる

平成七年 六年男児

ぼくの祖父は漁師だ。飛島で小さな船に一人で乗っていか釣りをしている。六十歳になるのだが、足も腰もしっかりしている現役の漁師だ。毎年夏になると家族で祖父のところへ遊びに行っている。しかし、今年の夏は母も妹もバレーの試合があるために行けない。父も遠洋漁業に出ている家にはいない。そこで、今年の夏は、ぼく一人で飛島の祖父のところへ遊びに行くことになった。飛島に着くと祖父は、

「光貴、一人でよぐ来たの。」と、本当にうれしそうだった。しかし、ぼくは、これから三日間一人で生活できるだろうか、とても不安になった。

ぼくは、祖父の家に着くと、テレビを見てそんな不安な気持ちをごまかしていた。すると、祖父がやってきて、

「光貴、いが釣りさ、いがねが。」

とぼくに言った。ぼくは、船酔いしたらどうしよう、祖

父に迷惑をかけるなあと思ってしばらく考え込んでしまった。でも、めったにない機会だし、祖父とだったらいいだろうだと思って、

「うん、行ってみっで。」と祖父に言った。祖父は、とてもうれしそうだった、ぼくもとてもうれしかった。さっきまでの不安な気持ちはどこかにいってしまった。夕方五時に出発するというので、ぼくはいつでも行けるように長そでと長ズボンに着がえた。夏とはいえ夜の海は冷えるからだ。

「ブロロロン。」エンジンがかかった。いよいよ出発だ。風は、酒田の方から吹いてくる。だしの風だ。かなり強い。祖父の白い髪が風になびいている。船は、港から外海に出た。「ザブーン、ザブーン」大きな波が船体に当たる。船はどんどん進む。トビウオの群れが、ぼくたちの目の前を横切った。

「ほれ、トビウオだ。」祖父が叫んだ。六時になるとたくさん電灯に一齐に明かりをつけた。船のまわりは、昼間のように明るくなった。いよいよいか釣り漁の始まりだ。しばらくすると電灯にさそわれてたくさんの魚が集まっ

てきた。ぼくは、いかはいないかと探したが、ぎんねんながら見つけることはできなかった。ふと見ると、細い魚がたくさん集まっていた。

「あれ、何ていう魚や。」ぼくが祖父に聞くと、

「あれはの、サヨリっていう魚だ。」祖父が優しく教えてくれた。

「へえ、あつたげほっせ魚いだなが。」ぼくが驚いて言う
と、祖父は、にこにこしながらうなずいた。

「キューー。」一匹の大きないかがが上がってきた。いかは、ほとんど甲板に落ちた。いかは、ぴくりともしないでじつとしてゐる。まるで忍者があたりをうかがっているかのようにだ。ただ背中の黒い模様だけが呼吸をしているように、消えたり現われたりしている。とても不気味だ。

「いがからかまいっど悪がら、触んな。」祖父は、ぼくに教えてくれた。ぼくは、いかがそんなに危ない生き物とは、それまで知らなかった。まわりの海を見回すと、ぼくたちの船の他にもたくさんのか釣り船が漁をしていた。しかし、その一匹以来何も上がってこない。

「今日は、いが、上がんねの。」祖父がそう言ったとたん、

二匹、三匹と、どんどんいかがが上がってきた。祖父は、手際よくいかを洗い、氷といっしょに箱につめていく「キューー、キューー。」といかは鳴きながら上がってくる。ぼくは、今までいかがが鳴くなんて知らなかった。初めて聞くいかの鳴き声は、とても苦しそうに聞こえた。

「おじいちゃん、おれ手伝う。」ぼくは弱ったいかをバケツで洗う仕事をさせてもらった。ぼくと祖父は、黙々と仕事を続けた。祖父とは何も話さなかったが、ぼくと祖父の息はぴったりと合っていた。いかは、全部で十五匹。祖父に言わせると、少ない方だそうだ。でも、ぼくにとっては大漁だ。

電灯の明かりに照らされた祖父の横顔は、とてもまぶしかった。その顔はぼくの家遊びに来るいつもの祖父の顔とは違っていた。祖父の力強く、頼もしいその姿をぼくは、忘れない。きっと父も遠い海で一生懸命こんな風に仕事をしていることだろう。そう思うと胸が熱くなった。